ラティガン喜劇におけることわざ

日本ことわざ文化学会会員
落合真裕

はじめに

19 世紀末から 20 世紀において、イギリス演劇界ではナショナリズムの高まりとともに社会問題や政治的な問題を観客に提示してその原因を追究しようとするリアリズム演劇に関心が高まっていた。一方で、イギリス演劇の伝統である風習喜劇（Comedy of Manners）[1]もまた、オスカー・ワイルド（Oscar Fingal O'Flaheritie Wills Wilde, 1854-1900）を経由して、20 世紀の劇作家たちに継承されていった。その継承者としてノエル・カワード(Sir Noël Coward, 1899-1973)やサマセット・モーム（William Somerset Maugham, 1874-1965）らがよく取り上げられるが、テレンス・ラティガン（Sir Terence Mervyn Rattigan,1911-77）もそのひとりで、上演回数 1,000 回を超える当時としては驚異的な記録を残し、人気劇作家として演劇界を賑わせた。現在では彼の作品の中でも、シリアスなドラマが国内外で上演、映画化されているため、風習喜劇作家としての印象は薄いかもしれない。また、多様性を認めるようになった現代においては、同性愛者としての側面に着目して作品をとらえる見方も増えてきており、主にシリアスなドラマが再評価され始めてきている。

だが、ラティガンは観客を笑わせる喜劇的な作品を書くことに関心が高く、25 歳の時に彼の名を一晩で演劇界に広めたヒット作『フランス語入門』（*French Without Tears*, 1936）は、英国演劇の伝統である風習喜劇の形式に倣った喜劇であった。彼は作品集の序文において次のように記している。

> True, I totally disapproved－and still do disapprove－of widely held notions that writing seriously for the theatre inevitably means writing serious plays, that serious plays are more difficult to write than comedies－in my case the reverse has been true－and that it is necessarily worthier to make an audience weep than to make it laugh.
>
> （Rattigan, *Collected Plays 1*, 7）

> 正直に、全面的に否定したのはー今もなお否定しているがー劇場のために真面目に書くというのは否応なしにシリアスな演劇を書くこと、シリアスな演劇は喜劇よりも執筆が難しいということー私にとってはその逆が真実であるがーそれから、当然観客を笑わせるよりも泣かせる方が、価値があるーといった考えが広く受け入れられていることである。

彼は自分の成功や喜劇を批判的にとらえるリアリズムに傾倒する一部の批評家たちや劇作家に対して、このように喜劇の創作の難しさと重要性を強調し積極的に喜劇を発表していった。

風習喜劇は社会的慣習や風習を嘲笑する演劇スタイルで、作中でウィットに富んだやり取りが特徴としてあげられる。そのなかで、作家独自の名句や警句が誕生し劇の内容や文脈を抜きにして取り上げられることもある。なかでもワイルドの警句は代表的でシェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）と同じように、名言集・警句集も出版されている[2]。

ラティガンの場合は、チェーホフ（Anton Pavlovich Chekohv, 1860-1904）のように自然主義的なスタイル、すなわち現実の世界での話し方をそのまま舞台に乗せているため、現実離れした形式的なウィットに富んだ台詞というよりも、多くの観客が知っている名作からの引用やことわざを頻繁に用いながら、喜劇的効果を高めている。そこで、本論では観客に笑いをもたらす仕掛けとしてことわざを効果的に用いている喜劇的な作品 6 作品を取り上げ、どのようなことわざを用いているかを確認するとともに、作品における役割について明らかにする。

１．テレンス・ラティガンとは

1911 年、ジョージ 5 世の戴冠式数日前に外交官の父親フランク（Frank Rattigan）と母親ヴェラ（Vera Rattigan）との間に生まれた。両親は海外で過ごすことが多くラティガンは父方の祖母のもとで育てられた。幼少期から演劇に興味を持ち劇場に頻繁に通うことで、独自に劇場感覚を身につけ劇作家を目指すことになる。ハロー校でもバーナード・ショー（George Bernard Shaw, 1856-1950）、ジェームス・バリー（Sir James Matthew Barrie, 1860-1937）やチェーホフといった多くの劇作家の作品を読んだ。フランス語の授業で戯曲を書く課題でも、教師が「フランス語はひどいが、劇場感覚は一流」と言ったと、ラティガン自身が戯曲集の序文で書いており、研究者の間ではよく知られた話である[3]。フランクはラティガンが劇作家になることには反対で、自分と同じ外交官の道を歩ませようとしていた。だが、ハロー校の後、オックスフォード大学のトリニティ・カレッジに進んだラティガンの興味は変わらず演劇にあり、入学後、オックスフォード大学演劇協会（OUDS）に入会する。そこでジョン・ギールグット（Sir John Gielgud, 1904-2000）監督、ペギー・アシュクロフト（DAME Peggy Ashcroft, 1907-1991）らが出演する『ロミオとジュリエット』に出演したり、演劇人たちとの交流を深めながら演劇の世界への道を切り開いていくことになる。その後、在学中にフィリップ・ヘイマン（Philip Heimann）との共作で『ファースト・エピソード』（*First Episode*, 1933）を上演し成功は収められなかったが、劇作家になる決意を固める。父親から 2 年間の猶予をもらい執筆活動に励むなか 1936 年、外交官を目指す青年たち

と、彼らの勉学の邪魔をして恋愛ゲームを楽しむ魅力的な女性との恋愛模様を描いた風習喜劇『フランス語入門』が大成功し、その後もヒット作を生み出していくことになる。『フランス語入門』後も、イギリス人貴族たちのマナーを重んじる姿を面白おかしく描いた『お日様が照る間に』（*While the Sun Shines,* 1943）も大ヒット作となる。

更には、実際にあった裁判を題材とした『ウィンズロー少年』（*The Winslow Boy,* 1946）、周囲の者たちから酷い仕打ちを受けながらも耐え忍ぶ老教師を描いた『ブラウニング・ヴァージョン』（*The Browning Version,* 1948）、孤独に耐え切れず自殺をはかろうとする女性を描いた『深く青い海』（*The Deep Blue Sea,* 1952）といった登場人物の心理を深く掘り下げたシリアスなドラマでも好評を博し、20 世紀を代表する劇作家としての地位を築いていく。

だが、1956 年に登場したジョン・オズボーン（John Osborne, 1929-1994）の『怒りを込めて振り返れ』（*Look Back in Anger*）の登場とともに、ラティガンの上層中流階級を中心に描く洗練された上品な作風は急に時代遅れとなり、一部の批評家や劇作家たちからは辛辣な批評を受け、演劇界でも軽く扱われてしまうようになる。

ラティガンは母親ヴェラと親しかったといわれているが、作中に頻繁に登場するのは父親フランクをモデルとした人物が多い。フランクはブロンド女性との浮気を繰り返し、彼の軽薄な特性を目にしてきたラティガンは、彼のような二重生活を送る人間たちを作品の中で主に笑いの対象として、時に同情の対象として描き続けた。また、フランクとの確執も父親と息子（あるいは親と子）の対立という関係で描き、ラティガンの作品は自伝的要素が色濃く反映されている。

２．風習喜劇とは

王政復古期にイギリス演劇は活気を取り戻し、風習喜劇が流行する。シェイクスピアが上流階級から庶民といった幅の広い層を観客の対象としていたのと比較して、玉井暲は次のように風習喜劇の特徴を述べている。

> すなわち、この新たに復活した劇は、貴族階級や上流階層を対象とした、いわば狭い世界の、限られた層からなる観客のあいだで楽しむ演劇となって様変わりし、そのなかで展開する劇的世界もそうした観客層の関心や趣味を反映したものとなった。登場人物たちの活動の舞台は都会的な感性や道徳の支配するロンドンの社交界であり、そこに登場する人物たちの会話では、機知にあふれた知的なせりふが飛び交うことになった。これが、王政復古期喜劇「コメディ・オブ・マナーズ」（Comedy of manners[風習喜劇]）である。　（玉井『コメディ・オブ・マナーズの系譜』, 2）

元来、風習喜劇は上層階級の間で当たり前とされている立ち居振る舞いや風習、風俗といった特定の社会での慣習「マナーズ」が基盤となり、そこからずれたものを笑いの対象として、

機知にとんだ台詞を交えながら面白おかしく描いた風刺性を持った喜劇であった。ストーリーは性的な欲望や不倫、浮気、誘惑、放蕩など反社会的で不道徳な内容を扱うため、非難されることも多かった。特にブルジョワ階級が台頭してくると、感傷主義が重視され感傷喜劇（sentimental comedy）に取って代わられ、19 世紀にはほとんど上演されなくなった。だが、19 世紀末にワイルドが復活させ、警句や格言的な表現で機知に富んだ台詞を生み出し、ブルジョア的価値観や慣習すなわち彼らの「マナーズ」を笑いの対象として、それらが浸透したイギリス社会を風刺した。ワイルド以降もイギリス社会の主に中流階級の慣習や規範を風刺する精神を根底に、社会の歪みを婉曲的、間接的に表現する喜劇としてカワードやラティガンらに継承されていった。

上述したように、風習喜劇には機知に富んだやり取りとして気の利いた格言や警句といった言語表現が用いられる。喜志哲雄は『英米文学入門』の中でワイルドの劇が単純なメロドラマ、感傷的な劇を逃れている理由の一つとして、気の利いた警句の存在をあげており[4]、風習喜劇の優れた特徴でもある。

ラティガン劇の場合は、ワイルドのような警句や名句といったものが存在しないわけではないが、むしろすでに観客が知っていることわざをタイトルや作中の劇的な展開を迎える場面で用いながら喜劇的効果を高める仕掛けをしている。

3. 『フランス語入門』におけることわざ

『フランス語入門』はラティガンのヒット作の一つで、1936 年に初演を迎えた後、1,039 回も上演するロングラン作品となった。外交官を目指す青年たちがフランス語学習塾でフランス語を習得する以上に、魅力的な女性に翻弄されながら恋愛のレッスンを重ねていくという喜劇である。青年のひとりケネス（Kenneth Lake）はこの学習塾に姉のダイアナ（Diana Lake）を連れてきている。と言っても、彼女はフランス語習得のためではなく、単に家族がインドにいるからという理由で、弟と一緒にフランスの学習塾に滞在している。ダイアナはフランス語習得には全く興味がなく、塾にいる青年たちを誘惑し、フランス語習得の邪魔をしながら恋愛ゲームを楽しんでいるファム・ファタール的な存在である。なかでもキット（Kit Neilan）は彼女に夢中であり、後からやってきた中年のロジャース中尉（LT.-CMDR. Rogers）とライバル関係になる。ブライアン（Brian Curtis）は外交官になるためというよりも、街で女性と話すときに必要な程度の会話力のみを習得すれば十分と考えており、フランス人女性と頻繁に出かけて楽しい日々を過ごしている。一方で、アラン（Hon. Alan Howard）はすでにフランス語で流暢に話すことができ、外交官として一番有望視されている。だが、作家になる希望を捨てられず悩んでおり、ダイアナにも冷たい態度を取り、彼女の誘惑を遠ざけている。というのも、アランは感情よりも理性を重んじて生きることを理想としているため、性的な魅力で惹きつけようとするダイアナを敵視している。ダイアナを中心に恋愛ゲームが展開される陽気な雰囲気とは対照的に、アランにだけ深刻さが漂っ

ている。

アランは繰り返されるダイアナからの誘惑に抵抗するのだが、彼女が “I love you.”[5] とアランに言うとそれまでの抵抗が嘘だったかのように、彼女の前にひれ伏し、ほかのライバルたちと彼女を巡って争い、理性よりも本能や欲望の言いなりになっていることに葛藤する。ところが、ダイアナの虜となってしまい学問を疎かにして争う男性たちとは異なり、ひとり彼女の誘惑に動揺しない男性ブライアンが、ダイアナに対して親密な関係を持つことをストレートに尋ね、拒絶されたという話をアランに話す。するとアランは、同じ行動に出ることを決意し、ダイアナを遠ざけようとする。その時に発せられる言葉がことわざ “Things done cannot be undone.”(ODEP, 199)[7]「いったんなされたことはもとに戻せない」[8]をもじった次の表現である。

What’s done can be undone. (Rattigan, *Collected Plays 1*, 66)

“Things done cannot be undone.”は“What’s done cannot be undone.”(ODEP, 119)と表記されることもあるが、ここではその一部を変えて一度試してしまえば再度起こることは防げるという意味にパロディ化している。ダイアナを遠ざけるため、あるいは彼女に一撃を与えるための行動を決意したときの台詞に、ことわざをもじった表現を用いることで、笑いの効果を高め、いわゆる観客に強い反応を引き出す「劇的なシーン」[9]のひとつとなっている。

この直後ダイアナは単に彼らを誘惑して男性をハンティングすることを楽しんでいるだけに過ぎず、アランを含めて誰のことも愛してはいなかったという現実に直面し、キットやロジャース中尉も目が覚め、アランも潔くイギリスに戻る決意をする。

４．『お日様が照る間に』におけることわざ

『フランス語入門』に続くヒット作として知られているのが、1943 年初演の『お日様が照る間に』である。結婚を控えたイギリス人の女性を巡って婚約者のイギリス人貴族とアメリカ人兵士、フランス人兵士が争う 24 時間の間に起こるドタバタ恋愛喜劇である。

イギリス貴族のハーペンデン卿（The Earl of Harpenden）にはエリザベス(Lady Elisabeth Randall)という婚約者がおり、翌日二人は結婚することになっている。結婚式の前日に、ハーペンデンは酒場で出会った泥酔状態のアメリカ人のマルヴェニー中尉(Lieutenant Mulvaney)を自宅に泊まらせることになる。そのことを知らずに、エリザベスは汽車で出会い、自分の結婚に反対するフランス人のコルベール中尉（Lieutenant Colbert）を伴い、ハーペンデンの自宅にやってくる。だが、エリザベスが訪ねて来た時に、ハーペンデン卿は出掛けており、エリザベスを娼婦と勘違いしたマルヴェニーはエリザベスを口説き落とし、エリザベスは婚約を破棄することを決意してしまう。突然、心変わりをしたエリザベスに驚き、事のいきさつを理解したハーペンデン卿はエリザベスに説得を試みようとする

が、マルヴェニーやコルベールが邪魔をする。そんな時に、長年ハーペンデン卿の愛人であったメイベル（Mabel Crum）が登場し、彼女との関係を彼らから追及され、結局ハーペンデン卿はメイベルと結婚することを決めてしまう。だが、マルヴェニーとエリザベスが二人で話をする機会を設け、冷静さを取り戻したエリザベスはハーペンデン卿との結婚を決意する。ハーペンデン卿はメイベルとの短時間の婚約を解消し、無事予定通りエリザベスと結婚することになる。

この作品においては、タイトルに次のことわざの一部が用いられている。

Make hay while the sun shines.（ODEP, 501）

「日の照るうちに草を干せ」[10] という意味で、ここではエリザベスをめぐっての戦いを指しているのは明白である。また、登場人物の出身国との関係性から、イギリスが地位をアメリカに奪われ、フランスにも邪魔されるという、当時のヨーロッパ協定とアメリカとの関係を風刺し、イギリス人の貴族の没落を滑稽に描いていると捉えることも可能である。作中で、ハーペンデン卿は田舎の屋敷を失い、海軍での試験にも落ちている。エリザベスもまた、総長から階級が落ち、二人の社会での地位の危うさが示されている。

さらにこの作品の中では「フェア・プレー」という言葉が繰り返し出てきており、エリザベスとの面会の順番も、式直前の付き添い人もゲームで決める設定になっており、抜け駆けを阻止するために「フェア・プレー」が連呼されるが、各々がフェア・プレーよりも好機を逃さずチャンスをものにしようと懸命になる。まさにフェア・プレーを重視する伝統的なイギリス人の風習が崩れ去り通用しなくなってきている様子を描いている。この作品で用いられていることわざの一部を使ったタイトルは、イギリス人とイギリス社会を風刺する効果を担っていると言える。

５．『三色すみれ』におけることわざ

『三色すみれ』（*Love in Idleness,* 1944）もまた、恋愛喜劇であるが中年の男女のカップルが主役となっている。オリビア（Olivia Brown）は未亡人で、息子のマイケル（Michael Brown）がカナダに留学している間に、既婚男性で大臣であるジョン（Sir John Fletcher）と恋に落ち、ジョンが借りているフラットで生活を共にしている。マイケルは母親とジョンの関係を知らずに帰国し、住居や家具など母親の生活のすべてがジョンによって支えられていることを知り、ジョンを敵視し、母親にも厳しく咎めハムレットのような態度を見せる。さらに、マイケルはジョンが帝国主義派の大臣であり、自分は反ファシズム派という社会的思想における違いも理由の一つとして、母親がジョンと結ばれることを頑なに反対し、母親に諦めさせようと、ジョンの妻まで自宅に連れてくる。その後、マイケルの思いを考慮してオリビアとジョンは別れを決めて、オリビアとマイケルだけでささやかな暮らしを始める。

3か月後、マイケルには思いを寄せる女性が現れてデートをすることになるが、彼女は地位や名声で相手を選ぶ俗物主義者のため、母子家庭で慎ましい暮らしをしているマイケルよりも、社会的地位や財力のある男性を選ぶ。そこへ、妻との離婚調停も落ち着き、大臣の職も降りて、求婚のためにオリビアのもとを訪れたジョンとマイケルが再会することになる。マイケルは彼の経済力と権力を借りて、好きな女性が別の男性とデートをしているサヴォイ・ホテルのレストランに予約を取り、マイケルとの関係を彼女に見せつけることでリベンジを果たそうと決意し、交換条件として母親との交際を認めることになる。

この作品のタイトルである“love in idleness”は「野生のパンジー」[11]のことを指し、一般的に“love-in-idleness”と表記される。また、Shakespeare の『夏の夜の夢』(*A Mid Summer Night's Dream*, 1594-1595)の妖精王オーベロン(Oberon)の台詞に出てくる惚れ薬も同じ名であり、瞼にたらされて目を開けた時に見たものに恋をするとされている。[12]ジョンが社会的な地位を放棄してまで恋愛成就のため一心不乱に突き進む姿は、惚れ薬で恋愛に盲目的になるキャラクターと重ねることもできるが、マイケルがスノッブなデート相手に復讐するためにジョンの経済力や権力を利用し、その結果ジョンとオリビアは結ばれて、マイケルとも和解が成立しているところから、次のことわざをもタイトルに関連していると推測できる。

Love is the fruit of idleness.（ODEP, 491）

「恋愛は閑人のする事である。」[13]という意味のことわざである。この作品はニュー・ヨークでの上演時、*O Mistress Mine*『ねえ、愛する人よ』と改題されている。『ねえ、愛する人よ』はシェイクスピアの『十二夜』(*Twelfth Night; or, What You Will*, 1601-1602)に出てくる道化フェステ(Feste)の歌で、歌詞は以下の通りである。

O mistress mine, where are you roaming?
O, stay and hear; your true-love's coming
That can sing both high and low;
Trip no further, pretty sweeting;
Journey's end in lovers' meeting
Every wise man's son doth know.[14]　（II，iii, 40－45）
ねえ、愛する人よ、どこへ行かれる？
ねえ、ここで聴いて、あなたの恋人がやってくるよ。
高い声でも低い声でも歌えるよ。
だから行かないで、かわいい人よ。
旅の終わりは恋人の出会い、
利口な人はみな知っているよ。

What is love? 'tis not hereafter;
Present mirth hath present laughter;
What's to come is still unsure:
In delay there lies no plenty,
Then come kiss me, sweet and twenty,
Youth's a stuff will not endure.[15] (Ⅱ, ⅲ, 48－53)
愛って何？未来のものじゃない。
今の笑いは今の楽しみ
これからのことは分からないから
ぐずぐずしても何も起こらない
だからキスをしよう、甘く何度でも
若さは長くは続かないからさ。

『十二夜』に登場するオリビアへの叶わない恋心、今を生きることと恋愛の楽しさを歌っているのだが、辞職してまで愛の道を選択する『三色すみれ』のジョンの生き方を想起させる。この歌にあるような人生で恋愛を楽しめるのは、ジョンのように経済的余裕、時間的余裕のある人たちであり、「三色すみれ」という意味だけではなく、"Love is the fruit of idleness." ということわざを連想させるタイトルにすることで婉曲的に人生の皮肉を伝えていると考えられる。

６．『シルヴィアは誰？』におけることわざ

アレキサンダー大王の社会的責務と内なる欲望との葛藤を描いた歴史劇に挑戦しながら、1950 年にラティガンは外交官のファンタジックな恋愛模様を描いた笑劇『シルヴィアは誰？』(*Who is Sylvia?*) を上演している。32 歳の外交官のマーク（Mark Wright/Earl of Binfield/ Lord St. Neots）には妻キャロライン（Caroline Binfield）と、5 歳になる息子がいる。だが、17 歳の時の初恋の相手シルヴィア（Sylvia）が忘れられず、シルヴィアを理想の女性として崇めブロンズ像まで作っている。そして、彼女と似た容姿を持つ若い女性を見つけるたびに、独身の友人オスカー（Oscar）が借りているフラットへ連れてきて、二重生活を試みようとする。1917 年のシルビアはダフネ（Daphne Prentice）、1929 年はノラ（Nora Patterson）、1950 年はドリス（Doris）である。だが、毎回フラットに来るたびに邪魔が入りマークの情事が成功することはない。というのも、マークの妻キャロラインがマークが長年 17 歳の時のシルヴィアを求めて浮気を繰り返していることを知っており、浮気相手との関係が深まらないように見張って裏で対処していたのであった。そして、最後に彼女はマークの初恋相手であり、現在 63 歳となったシルヴィアと友人として交流があり、今度、昼食

に招くことをマークに告げる。彼は予想もしていなかった現実を突きつけられることになる。

実現しなかった二重生活と過酷な現実を突きつけられたマークにオスカーは次のように言う。

Have your cake and eating it, eh? (Rattigan, *Collected Plays 1*, 584)

このセリフには " You cannot eat your cake and have your cake (it)."(ODEP, 215)が用いられている。『英語ことわざ辞典』では「(君は菓子をたべてなおその菓子を持っているわけにはいかない.) 菓子は食べれば無くなるもの. 世の中はよいことづくめにはいかぬとの意.」)[16] と記されている。64 歳にもなって 17 歳の頃の自分でいようとする、また、結婚生活と愛人との生活という二重生活、いずれもうまくいかなかったというマークの愚かさを嘲笑する台詞となっている。

また、このオスカーの言葉を受けてマーク本人は次のように言う。

Oh, well, never say die. (Rattigan, *Collected Plays 1*, 584)

"Never say die (or 'die')."(ODEP, 563) は『英語ことわざ辞典』では「(死ぬなどというな). 決して降参するなとか絶望するなの意.」[17] と記されている。弱音を吐いたり、悲観したり、落胆するなという本来は未来に希望を持ち、前進していくことを伝えることわざであるが、ここでは非道徳的で幻想の世界を理想とし、現実を受け入れられない人間の愚かさを風刺し、いずれも笑いをもたらす台詞としてことわざが活用されている。

7.『眠れる王子』におけることわざ

シリアスなドラマでも成功を収めながら、1953 年にラティガンはファンタジックなコメディ『眠れる王子』(*The Sleeping Prince: An occasional fairy tale*)を発表する。後に、『王子と踊り子』*The Prince and the Show Girl* (1957) というタイトルで、ローレンス・オリヴィエ (Laurence Kerr Olivier, Baron Olivier of Brighton OM, 1907-1989) とマリリン・モンロー (Marilyn Monroe, 1926-1962) という豪華なキャスティングで映画化もされ成功を収めた。この作品は『眠れる森の美女』(*La Belle au bois dorman*) とシンデレラス・ストーリーが織り交ざった物語で、架空の国カルパチア王国の若き王ニコラス八世(His Majesty King Nicholas Ⅷ of Carpathia) と父親であるチャールズ大公 (His Royal Highness, The Grand Duke Charles, Prince Regent of Carpathia) が、ジョージ五世の戴冠式に出席するためロンドンを訪れている期間に起こるロマンティック・コメディである。政治思想や方針、価値観などの相違から王と大公との間には確執がある。だが、大公の一晩過ごす相手として公使館

に呼ばれたアメリカ人の女優メアリー（Miss Mary Morgan）が、大公に「愛の重要性」をおしえることで父親と息子の関係を和解へと導いていく。また、メアリーは大公のみならず、王からも大公の妻からも信頼と愛情を得ることに成功し、王家の一員として迎えられ、戴冠式のパーティーに勲章をつけて出席することになる。式典後、メアリーは一緒にカルパチア王国に行かないかと誘われるが、「素晴らしい夢を見て、それから目が覚めるのは、悲しいことね。でも、覚めても夢の素晴らしさは変わらない、そうじゃない？」 "Coming out of a heavenly dream can be a little sad, I grant, but that doesn't make the dream any the less heavenly, does it?"[18] と、彼らとの出会いや大公との恋愛をつかの間の夢物語としてとらえ、彼らのもとを去る。

この作品では、ラティガン劇定番の父と息子の確執が描かれているが、息子への愛情を示すことで和解へと導こうとするメアリーと大公が言い争いになった後、メアリーの説得に押され大公は次のように言う。

I have decided to let bygones be bygones.（*Collected Plays 2,* 71）

"Let bygones be bygones (, and fair play for the future)."(ODEP, 96) は『英語ことわざ事典』では「(過ぎ去ったことは過ぎ去ったことにしよう（そして将来は公明正大にやろう)) . 過去は問わないことにしようの意.」[19] と書かれている。この台詞は息子であるニコラス王と大公の関係を修復へと向かわせる突破口となる。この言葉を大公がニコラス王に伝えると、ニコラスも徐々に父親に心を開き父親を受け入れようとする。また、それだけではなく、このことをきっかけにメアリーとの関係も良好となり、二人は愛情関係で結ばれることになる。この作品では、上記のことわざは笑いをもたらす効果を高めているというよりは、演劇の中における重要な展開場面、劇的シーンでカギとなる役割を果たしている。

８．『愛をたたえて』におけることわざについて

『愛をたたえて』（*In Praise of Love,* 1973）はもともと『夜明け前に』（*Before Dawn*）と『リディアの後で』（*After Lydia*）の 2 作品を同じキャスティングで同時上演するダブルビル形式で上演された作品で、のちに『リディアの後で』のみを『愛をたたえて』と題して、1 作品のみでニュー・ヨークでは上演された。ここでは、後者の『愛をたたえて』を取り上げる。

この作品は、間もなく訪れる最愛の家族の死を乗り越えようとする者たちの心理や感情が深く掘り下げて描かれている作品で、ほかのドタバタ喜劇とは異なり落ち着いた悲喜劇的な作品となっている。登場人物はたったの 4 人のみである。セバスチャン（Sebastian Cruttwell）は小説家として成功することができず、批評家をしている中年の男性である。彼の妻リディア（Lydia Cruttwell）はエストニアの難民で、第二次世界大戦中にドイツでセバ

スチャンと出会い、彼女を救うために彼は彼女と結婚をする。結婚後、イングランドで落ち着いたら離婚手続きをする予定だった。だが、息子ジョーイ（Joey Cruttwell）が生まれたことで、彼らは結婚生活を続けることになった。

ジョーイが 20 歳になり、始めて彼の書いたドラマがテレビで放映されることになり、古くからのセバスチャンの友人で小説家として成功を収めているリトアニア系アメリカ人のマーカス（Marcus Waldt）が一家を訪れる。リディアは白血病を患い、家族にはそのことを隠しているがマーカスには伝えている。マーカスはリディアに以前から思いを寄せているのだが、リディアは自分がいなくなった後、仲たがいしているセバスチャンとジョーイがうまくやっていけるかどうかを心配し、マークに相談する。一方で、実はセバスチャンはリディアに内緒で医者から彼女の病状と余命を伝えられており、気づかれないようにするために平然を装い、リディアやジョーイに横柄な態度を取り続けている。マーカスはリディアにセバスチャンがすべてを知っていることを伝え、リディアはセバスチャンの真の愛情に気づき、ジョーイとセバスチャンの仲裁役となる。ジョーイは父親の身勝手で傲慢な態度と、古い固執した考え方や価値観に反抗しているのだが、正直であること以上に、マナーを重んじることをセバスチャンは大事にしており、横柄な態度の裏側にある深い心理を理解させようとリディアはジョーイと次のような対話をする。

> LYDIA. Dishonest. Oh God, please let's have a little return to dishonesty! It was such a much happier world when people told us little lies about ourselves.
> JOEY. (*Scornfully.*) Mum, really! Manners Makyth Man!
> LYDIA. (*Angrily.*) Yes they do, and they makyth other men feel better. It's what I said earlier. Joey. It's people that count, not things— (Rattigan, *Collected Plays 2*, 607)
> リディア．不正直。おやまあ。不正直にちょっと戻ってみましょう。自分たちのことに少し嘘をついたら、ずっと幸せな世界になるんじゃない。
> ジョーイ．（軽蔑するように）ママ、まさか。「礼節（マナー）が人を作る」って言うんじゃ。
> リディア．（怒って）そう。それが人を作るの。それに、ほかの人たちを気分良くさせるの。それが、私がさっき言ったことよ。ジョーイ。大事なのは人ね。ものじゃなくて。

ここでは“ Manners maketh (make the) man.” (ODEP, 508)[20] ということわざが用いられている。『英語ことわざ辞典』では、“Manners make (or makes) a man, quoth William (of) Wickham.と表記され、意味は「(行儀（のよさ）が人物を生む）とウィリアム・ウィッカムが言った).」[21] である。このことわざはもともとパブリック・スクールのウィンチェスター・カレッジやオックスフォードのニュー・カレッジの創立者ウィリアム・ウィッカム (William of Wickham, 1367-1404）が創設校に記したモットーで、「教養人としての地位を作るのは

我々の礼儀作法である」[22] から礼儀作法(マナー)が何よりも大事であることを伝えている。

このことわざを用いることで、リディはセバスチャンの態度や姿勢は社会から求められているマナーゆえに生じた結果であり、真意を語れない理由もそこにあることをジョーイに諭す。感情や内なる思いを率直に、正直に伝えることをしないセバスチャン自身もその特性を「イギリス人の悪徳」“Le vice Anglais”[23] と呼んでおり、マナーを重んじるイギリス人の英国性ともいうべき性質を誇張して描き、滑稽さを浮かび上がらせていると同時に、マナーを重んじる風習を風刺している。この作品では人の死が背後にあるため、他の喜劇とは異なり爽快な笑いには結び付きにくいが、このやり取りの後ジョーイはセバスチャンに歩み寄っていくため、和解へと繋がる重要な台詞となっており、作品の主要テーマともなっている。

おわりに

本論では、ラティガン喜劇において喜劇的効果を高める仕掛けとしての機能を果たしていることわざに焦点を当てた。いずれも作品全体のテーマと関連性があり、物語展開において劇的な場面で用いられたり、笑いの効果を高めたり、風習喜劇の要素の一つである社会風刺といった側面で効果的に機能していることが確認できた。そして、それらを観客の視点に立って考えると、登場人物たちの対話やストーリー全体において重要な役割を果たしている以上に、作者ラティガン自身が観客に笑いをもたらす効果を意識していることがうかがえる。つまり、作者と観客との対話において、ことわざを用いた効果が発揮されていると言える。言い換えれば、ことわざを用いているのは観客の反応を意識して創作したラティガンの「仕掛け」の一つであり、観客にもたらす喜劇的な爽快や知的刺激なのである。

また、作者と観客との対話ということを踏まえると、使用されていることわざの意味について疑問を投げかけている、あるいは問題提起しているともとらえることができる。例えば、「一度してしまったことは本当に取り返しがつかないのか」、「好機を逃さないようにすることがいつも正しいのだろうか」、「恋愛は金銭的余裕がないとできないことなのだろうか」といったように、ことわざそのものが示す内容を、逆説的に提示していると受け取ることも可能である。

風習喜劇は間接的に社会の歪みや人間の偽善ぶりを提示することが定番であるから、パラドキシカルな手法で表現したとも言えるが、常識の枠にとらわれない生活を送ったラティガンだからこそ、そのような表現形態になったのかもしれない。ラティガンは当時の社会では受け入れがたかった同性愛について、作品にその断片を時々見せることもあったが、私生活では堂々と同性愛者としての自己を開示し、交際関係も包み隠すことなく周囲に見せていた。また、父親や、大劇作家、一部の権力を持った批評家にも果敢に立ち向かい、社会の既定の枠にとらわれている作家ではなかった。そのようなラティガンの特性も影響を与えているかもしれない。

今回はラティガン劇の中でも作品全体のテーマや劇的なシーンで喜劇的効果を高めていることわざのみに焦点を当てたが、作中で用いられているほかのことわざ、さらには、シリアスな劇におけることわざについても確認することが今後の課題である。また、ラティガンはことわざのほかにもシェイクスピアの作品からの引用も多用しており、ことわざと同じように笑いの効果を高めるためや、劇的な場面の仕掛けとして用いている。ことわざのみならずシェイクスピアという切り口から作品を分析することも、ラティガン劇への理解をさらに深めることに繋がると考えられる。

注

１．風俗喜劇とも呼ばれる。

２．Oscar Wilde. *Epigrams of Oscar Wilde-Wordsworth Reference*. Wordsworth Editions, 1996.　や、Oscar Wilde. *Oscar Wilde's Wit and Wisdom: A Book of Quotations*. Dover Publications, 1998.　などがある。さらに、*The Guardian* の記事ではワイルドの警句で引用が多いトップ 50 が取り上げられておりキャプションに“Probably the most-quoted author after Shakespeare, and certainly the wittiest, Wilde's elegantly barbed observations are as popular than ever more than a century after his death in November 1900.”と、ワイルドの警句はおそらくシェイクスピアの次に引用されていると書かれている。Zhenia Vasiliev and Adam Frost. Culture: *Oscar Wilde's most enduring epigrams.* 2012-11-27. *The Guardian*. (https://www.theguardian.com/culture/graphic/2012/nov/27/oscar-wilde-epigrams-quotes-infographic), 参照日 2022 年 12 月 20 日.

３．Rattigan, *Collected Plays 1*, 361

４．喜志『英米演劇入門』, 109 頁

５．Rattigan, *Collected Plays 1*, 65

６．Rattigan, *Collected Plays 1*, 66

７．英語のことわざの引用は F.P. Wilson, ed. *The Oxford Dictionary of English Proverbs : Third Edition*. Oxford: Oxford University Press, 1970.からとし、以降 ODEP とページ数を本文内に記す。

８．大塚・高瀬共編『英語ことわざ辞典』, 628 頁

９．ボール『戯曲の読み方　戯曲を深く読みこむために』, 57 頁

10．大塚・高瀬共編『英語ことわざ辞典』, 423 頁

11．松田編『Kenkyusha's English-Japanese Dictionary for the General Reader リーダーズ英和辞典　第 2 版』1489 頁。 “WILDE PANSY”と表記されている。

12．オベロンは作中で次のように言っている。William George Clark and William Aldis Wright, editors. *The Works of William Shakespeare*. Macmillan & Co ltd and St Martin’s Press, 1961, p.174.

It fell upon a little western flower,
Before, milk-white, now purple with love's wound,
And maidens call it "love-in-idleness."
Fetch me that flower; the herb I showed thee once.
The juice of it on sleeping eyelids laid
Will make or man or woman madly dote
Upon the next live creature that it sees.
Fetch me this herb, and be thou here again
Ere the leviathan can swim a league.　（下線筆者）（2.1.166-174）

13. 大塚・高瀬共編『英語ことわざ辞典』, 417 頁
14. Clark and Wright, *The Works of William Shakespeare*, 302
15. 同書, 302
16. 大塚・高瀬共編『英語ことわざ辞典』, 733 頁
17. 大塚・高瀬共編『英語ことわざ辞典』, 469 頁
18. Rattigan, *Collected Plays 2*, 86
19. 大塚・高瀬共編『英語ことわざ辞典』, 392 頁
20. 辞書によっては"makyth"を"maketh" や"make" と表記されていることが多いがオリジナルは "makyth"である。Winchester College. "Motto and Crest". *Heritage: How Has History Shaped Our School*. (https://www.winchestercollege.org/welcome/heritage)　参照　2022 年 12 月 20 日
21. 大塚・高瀬共編『英語ことわざ辞典』, 432 頁
22. スピーク監訳『オックスフォード　英語ことわざ名言事典』, 288 頁
23. Rattigan, *Collected Plays 2*, 618

〔参考文献〕

【書籍】

Bertolini, John A. *Bernard Shaw and His Contemporaries: The Case for Terence Rattigan, Playwright*. Plagrave Macmillan, 2016.
Clark, William George and Wright, William Aldis, editors. *The Works of William Shakespeare*. Macmillan＆Co ltd and St Martin's Press, 1961.
Darlow, Michael. *Terence Rattigan: The Man and his Work*. Quartet Books, 2000.
Fox, Kate. *Watching the English: The Hidden Rules of English Behavior*. Hodder, 2004.
Hirst, David L. *The Critical Idiom 40: Comedy of Manners*. Jump, John D. Founder Editor. Methuen＆Co Ltd, 1979.
Palmer, John. *The Comedy of Manners*. Russell＆Russell Inc, 1962.
Peacock, D. Keith. *Changing Performance: Culture and Performance in the British Theatre*

since 1945. Peter Kangm 2007.
Rattigan, Terence. *The Collected Plays of Terence Rattigan. Vol. 1*. The Paper Tiger, 2001.
Rattigan, Terence. *The Collected Plays of Terence Rattigan. Vol. 2*. The Paper Tiger, 2001.
Rusinko, Susan. *Terence Rattigan*. Twayne Publishers,1983.
Speake, Jennifer, editor. *Oxford Dictionary of Proverbs: Sixth Edition.* Oxford University Press, 2015.
Wansell, Geoffrey. *Terence Rattigan*. St. Martin's Press, 1997.
Wilson, F. P., revisor. *The Oxford Dictionary of English Proverbs Third Edition*. Oxford University Press, 1970.
Wolfe, Peter. *Terence Rattigan: The Playwright as Battlefield*. Lexington Books, 2019.
上田和夫編『イギリス文学事典』研究社、2004 年。
大塚高信・高瀬省三共編『英語ことわざ辞典』三省堂、1995 年。
奥津文夫『日英ことわざの比較文化』大修館書店、2000 年。
喜志哲雄『英米演劇入門』研究社、2003 年。
三省堂編『新明解故事ことわざ辞典　第二版』三省堂、2021 年。
スピーク，ジェニファー編『オックスフォード　英語ことわざ･名言辞典』澤田治美監訳　赤羽美鳥・杉山正二訳　柊風舎、2019 年。
ボール，デヴィッド『戯曲の読み方　戯曲を深く読みこむために』常田景子訳　ブロンズ新社、2003 年。
時田昌瑞『岩波ことわざ辞典』岩波書店、2000 年。
玉井暲他『コメディ・オブ・マナーズの系譜　王政復古期から現代イギリス文学まで』音羽書房鶴見書店、2022 年。
日本ことわざ文化学会編『世界ことわざ比較辞典』岩波書店、2020 年。
山田雅重『日英ことわざ文化辞典』丸善出版、2019 年。
【インターネット資料】
Winchester College. "Motto and Crest". *Heritage: How Has History Shaped Our School*. (https://www.winchestercollege.org/welcome/heritage)　参照　2022 年 12 月 20 日
Zhenia Vasiliev and Adam Frost. Culture: *Oscar Wilde's most enduring epigrams.* 2012-11-27. *The Guardian*. (https://www.theguardian.com/culture/graphic/2012/nov/27/oscar-wilde-epigrams-quotes-infographic), 参照　2022 年 12 月 20 日.